

報告

## 軽度発達障がい児に対する理学療法士の関わり方 —第一報—

### The Roles of Physical Therapist for Children with Mild Developmental Disorders: First Report

小峯 武隆<sup>1)</sup> 岡 健司<sup>1)</sup>  
畑中 良太<sup>1)</sup> 野村 和樹<sup>2)</sup>

**要約**：従来、児童福祉領域での理学療法士は、肢体不自由児を対象として関わってきた。近年、軽度発達障がい児の自閉症スペクトラム、注意欠如・多動性障害、学習障害等に対する、理学療法士による身体機能向上が期待されている。以前より問題視されている子どもの不器用さは、軽度発達障害に合併する発達性協調運動障害の一つとして注目されつつある。児童の発達性協調運動障害は、学校での学習面のみでなく日常生活動作の困難性を招いている。発達性協調運動障害の改善には、高次脳機能障害や運動機能障害のリハビリテーションを専門とする理学療法士が必要とされる。

**キーワード**：軽度発達障害、発達性協調運動障害、児童福祉、理学療法

#### 1. 児童福祉領域での理学療法士の関わり

日本の児童福祉は、養護や障害の有無に関わらず、18歳未満のすべての児童を対象とする。従来、児童福祉領域において理学療法士の関わる対象は狭く、子どもに対する理学療法は大半

が肢体不自由児へのリハビリテーションに限られていた。

しかし、「最善の利益の尊重」という児童福祉の理念からは、あらゆる障がい児に対して理学療法士が力を注ぐことが望ましいと、筆者らは考えている。

日本の児童福祉は、児童を権利の主体とした児童福祉法が昭和22(1947)年に制定されたことから始まり、すべての児童が健全に育成されるように改正が重ねられてきた。平成30(2018)年には、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士

---

Takenori Komatsu

E-mail : komatut@kawasakigakuen.ac.jp  
大阪河崎リハビリテーション大学

1) リハビリテーション学部 理学療法学専攻

2) リハビリテーション学部 言語聴覚学専攻

2018年9月13日受付、2018年12月3日受理

などのリハビリテーション職を配置するように、児童福祉関連施設における専門職員体制が見直された。

こうした状況の中で、児童福祉領域への理学療法士の関わりは今後ますます重要性を増すと考えられる。とりわけ、発達障害（自閉症スペクトラムや広汎性発達障害）は、理学療法士による運動療法が有効であると考えられる。なぜなら発達障害は「落ち着きがない」「手先が不器用」といった傾向と深く関連しているため、理学療法士が実施する運動療法によってこれらの傾向を改善することで、学校での生活や学習の困難さを軽減することが期待できるからである。

## 2. 軽度発達障害への理学療法士の関わり

文科省による平成26（2014）年度学校基本調査によると、義務教育段階（小学校・中学校）における児童生徒数は約1,013万人で、「特別支援教育資料」と「通級による指導実施状況調査結果について」によると約40万人もの子どもたちが障害を抱え、特別支援を受けている。特に軽度～中度の障害を持つ子ども達の増加が著しい<sup>1)</sup>。

軽度の障害のなかでも、近年、発達性協調運動障害が特別支援教育において注目されている。これは、従来では理学療法の対象となることは皆無に等しかったが、いわゆる「不器用さ」と関連したものであり運動療法の対象となるため、理学療法士が支援すべき障害となりつつある。

発達性協調運動障害に対する理学療法では、手先の巧緻性運動やバランス運動を適切に評価して改善することが必要となる。評価においては、器用さ、不器用さの検査バッテリーである Movement assessment battery for children

(MABC) が活用できると考えられる。これは、合計8項目（手指の器用さ3項目、ボール操作能力2項目、静的・動的バランス能力3項目）の小テストを組み合わせ、総合的に子どもの器用さの程度を評価する検査である。先行研究<sup>24)</sup>から、協調運動の発達検査としての妥当性が高いことが示されている。MABCのような検査を用いて、発達性協調運動障害の診断の有無に関わらず、不器用な子どもにアプローチすることは、理学療法士が今後取り組むべき課題であろう。

筆者らが理学療法士として児童発達支援に関わるなかで、発達障がい児を育てる母親から相談を受けることがある。器用さに関する相談として、小学校低学年では「胸の前ボタンを留める上着では、着脱時間が非常に長い」、「箸の持ち方がおかしく、コップを傾けてしまう」、「男の子の便所を汚す」といった内容が多い。小学校高学年になると、「コンパスや定規が上手く使えない」、「折り紙が上手にできない」、「音に合わせてのダンスや体操が苦手」、「ボールを打つ、蹴ることが苦手」、「水泳や鉄棒ができない」といった内容を聞くことが多い。すなわち、小学校低学年では日常生活の動作、高学年では学校生活で必要とされる運動に関する内容が多くなっているようである。

理学療法士は、安全かつ運動発達を促す段階的なプログラムを作成することができる専門職である。そのため、不器用さからくる日常生活や学校生活の不自由に対して、理学療法士が関わることは重要であると考えられる。

## 3. 児童福祉領域において理学療法士（専門職）が他職種と連携してできること

子どもに関わる多くの専門職（保育士・保健師・教師等）は、子どもの不器用さに気づいても、

それが通常の範囲内なのか、通常を逸脱しているのかを判断しかね、「成長すれば器用になるだろう」と静観することが多いと言われている<sup>5)</sup>。また、幼稚園教諭を対象とした軽度発達障害に関する意識調査研究<sup>6)</sup>のなかで、保育者が支援で困難を抱えていても、相談すべき状況か否かの判断や、適切な相談先の選定で悩んでいることが示されている。今後の研修における教諭の希望では、「現在の問題解決方法を知りたい」、「保育実践を学びたい」、「専門知識を得たい」という項目が多く占めていた。これは、発達障害の根本的な考え方の多様性からくる現状理解への不十分さを示すものであると推察される。

そこで、医療的ケアの視点を持ち、身体的機能を客観的に評価できる理学療法士が、養育者や他職種に積極的に助言することが必要だと考えている。

#### 4. 不器用な子どもへの理学療法士の関わりの一例

ここで、筆者らが、ある障がい児の日常生活の改善に関わった例を紹介する。小学校高学年の障がい児の保護者から、子どもが「落ち着きがない」、「座っていてもガサガサする」、「ご飯をよくこぼす」、「筆圧が低く強く書くことができない」という相談があった。この子どもの家庭訪問で、「立位・座位姿勢が悪い」ということに気づいた。その他の運動を確認したところ、片脚立位と爪先立ちが不安定であり、腕立て伏せは2回程度しか行えなかった。身体機能評価によって、骨盤と体幹の筋緊張の低下、握力を含む上肢の筋力低下が主要な問題だと考えられた。個別支援プログラムとして、①頸部・体幹のストレッチおよび筋力トレーニング、②逆上がり(図1)、③手押し車、④背伸び運動(図2)などを3回/週以上実施した。その結果、半年後には座っていてガサガサ揺れるような動作は



図1：逆上がりのトレーニング  
上肢の力で、自分の体重を持ち上げるための逆上がりの練習風景



図2：背伸び運動（自分でできる棒体操）  
肩回りと体幹のストレッチ運動

見られず、筆圧も一定になった。現在、その子どもは中学生では通級による指導を受けながら学校生活を送っている。テニス部に在籍してスポーツ活動にも参加している。

このように、日常生活動作から身体機能の問題を抽出し、専門知識を活用して児童自身と養育者に安心をもたらすことは、非常に重要なことである。

一般的に手指の器用さには握力が関係すると考えられる。鈴木<sup>7)</sup>は「スポーツ力として、また、生活力として握力と腕力を子どものころから鍛えることは、大変意義あることだ」と述べている。握力や全身持久力の運動プログラムを取り入れた遊び・リハビリテーション、特に遊具の登り棒や雲梯、ジャングルジム等などは、子どもにとっても楽しく取り組むことができる課題である。上肢を用いたぶら下がり動作は、握力と同時に、自重を支え移動するために上肢・体幹・下肢の協調的な動作を必要とする。発達性協調運動障害のような「不器用さ」と関連する症状に対しては、握力を強化する運動を取り入れることが有用である可能性が考えられ、今後の検討が待たれる。

#### [引用文献]

1) 文部科学省：－学校基本調査－平成26年度結

果の概要．文部科学省，2014．[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1354124.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1354124.htm) [accessed 2018.2.1]

- 2) 北澤純子，花井忠征：Movement-ABCを用いた協調運動検査について．岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編，40:39-55, 2001.
- 3) 渋谷郁子：幼児の不器用さについての保育者の印象－M-ABCとの関連から－．立命館人間科学研究，21:67-74, 2010.
- 4) 橋本竜作：DCD 児の協調運動技能チェック票作成とその有効性の検証．Human Developmental Research, 31:189-192, 2017.
- 5) 浜田恵：不器用な子どもをもつ保護者の養育行動と支援～縦断研究から見えてくるもの～．チャイルドヘルス，18:435-439, 2015.
- 6) 吉川はる奈，尾崎啓子，細淵富夫：幼稚園教諭を対象にした保育現場における軽度発達障害の意識調査に関する研究．埼玉大学紀要，57:159-165, 2008.
- 7) 鈴木正成：子どもたちに“玄米ニギニギ体操”－握力と咀嚼力もつくダンベル体操－．小児歯科臨床，5:49-54, 2000.